日曜日の午後

　いつの日曜日のことだったか、アユミギャラリーを出て通りをトボトボ歩いていると、ボクの前に悠くんは現れた。神楽坂のまちを自転車で元気よく走りまわっている６歳の悠くんだ。「キミは、キイチくんの友達なのかい？」自転車に跨ったまま、透きとおるような瞳でボクを見上げるとそう言った。その澄んだ目がとても印象的で、あんなに綺麗な目は未だかつて見たことはなかった。“ キミ ”とか“ キイチくん ”とかいろいろとひっかかったが「そうだよ」と答えた。恐らく、自分の父親をそう呼ぶのは母方の祖父の言い真似なのだろうと思った。「じゃあ、乗ってもいいよ。」「えっ！」「キイチくんの友達だから乗っけてあげるよ！」「い・・・いいよ。」「大丈夫だよ！キイチくんも乗ったんだから。」「えっ！」喜一先生はいい歳してそんなことしているのか、と思いながらもそれじゃあということでその日は一日悠くんのお供をすることになった。白銀公園をクルクル回ったり、赤城神社に行ってプラプラしたり、そして、「ここは秘密だよ。」と言って裏通りに入った通りとの段差を利用して滑り台がついている公園に連れて行ってくれたりした。

　それから 15 年の月日が流れ、ボクと悠くんは訳あって西武新宿線の花小金井駅で一緒に電車を待っていた。「はい。あげるよ。」ボクはレモンのど飴を悠くんの目の前に差し出した。「あっ・・・キシリトール入りだ。・・・ドモ。」両手をズボンのポケットから出し、袋を破って飴を頬張ると、無精ひげの生えた顎を突き出すようにペコリとした。「ムサ美の建築はどう？」「おもしろいッスよ！」「そう！おもしろい？！」左耳でピアスが 3 つも揺れている。「学校へは西武線で行くの？」「うん。東村山で乗り換えて国分寺線で鷹の台」「ふ～ん中央線じゃないんだ。」「中央線は高いから・・・JR は使えねえヤツだよ。」「使えねえヤツか・・・そんなに高いの？」「定期で倍は違うよ。」「ハーッ！そんなに違うの？！そりゃあ使えねえヤツだなあ。」そんなことを言いながらボクと悠くんは東村山行きの電車に乗り込んだ。日曜日の車内は空いていて、のどかな陽だまりだけがそこにあった。そして窓に沿った長椅子の真ん中に二人だけで並んで座った。「悠くんはサァ・・・」「はい？」悠くんは大股で座った両膝に両肘を乗せてさっきあげた飴の袋を弄っていた。「悠くんはサァ・・・建築家になるの？」「なりますねえ。」意外だった。ボクは 3 つのピアスからしてテッキリ「どうしようかなあ？」とか「わかんない」といった答えが返ってくるものだと思っていた。「えっ！なる？！」「えぇ。なりますねえ。」そう言うと昔からちっとも変わらないその透きとおった瞳でこっちを向いた。それは、どうしても、何が何でも、といったような力みが全く感じられず、「疑う余地なく当然そうなるもの。」「普通そうでしょ。」とでも言いたげな程何気なかった。「そう・・・悠くんは建築家になるんだ。」「えぇ・・・」「そうか！そうか！悠くんは建築家になるかぁ！そうか！そうか！」ボクはなんだか嬉しくなって悠くんの背中をパシパシと叩いた。

　「ど・・・どうしちゃったの？」そう言いながら悠くんは防御をし出した。そんなことをしていたら電車は鷹の台に到着した。「ああ・・・僕はここで降りますから。」悠くんはそう言ってパシパシから逃れるように席を立った。「学校行くの？」「そうじゃないけど・・・。ここにバイク置いてあるから、それでちょっと・・・。」「そうなんだ・・・。そいじゃあ・・・またね。」一緒に席を立って悠くんを見上げて、一瞬、またお供をしようと思ったがボクは何かを察して止めた。バイバイと悠くんは手を振った。「あっ・・・これ・・・国分寺が終点で、そこで中央線に乗り換えできますから。」そう言って電車のドアが閉まるとペコリとして悠くんは改札口へと背中を見せた。

　ところで、今になって思うんだけど・・・。「どうしちゃったの？」って・・・そりゃあこっちのセリフだよ悠くん。いったいどういう訳なんだ！急に居なくなったりしてさッ。